

伊吹山花だより

第59号 (令和4年5月)

上野区：ユウスゲと貴重植物を守り育てる会

登山に最適な5月。花を愛でてゆつくりと。

暖かな陽光が降り注ぐ5月。
紫外線に気を使いながらも、存分に伊吹山の花や自然を楽しんでください。
そしてリフレッシュして、明日からまた一歩ずつ前に進みましょう。
山に来ればきっと晴れ晴れしますよ。



ヤマシャクヤク
(山芍薬)

山地帯に生え全体に芍薬に似るのが名の由来。茎の先端に4～5cmで清楚で白色の花を1つつけ、上を向いて開く。大きな花の中に黄色の雄しべと赤い雌しべ。

初めての出会いに暫し
佇んだ
ヤマシャクヤクの蒸しさに



イワツクバネウツギ
(岩衝羽根空木)

石灰岩地の岩場の落葉低木。新枝に白い縁取りの淡紅色の花を2個つける。果実の先端に残る萼片を羽根つきの衝羽根に見立てたのが名の由来。



オドリゴソウ
(踊子草)

花の形が笠を被って踊る人の姿を思わせるのが名の由来。花の色はピンク～白色で数回輪生状態となり茎の上部に数段つける

朝の日和とオドリゴソウの陽気とが重なって見えた得した火曜



ホタルカズラ
(瑠璃蔓)

花の背後の赤いほかしが名の由来。咲き始めは赤紫のものが、次第にコバルトブルーに変わっていく。花に大の字の白い筋が入る。

伊吹野にホタルカズラが点々と瑠璃の輝きを胸に火が点く



エビネ
(海老根)

葉の開くのに先立って花茎を出し、繸状花序に5～15個つける。地下球根が連なっている形が海老の背中に見えるのが名の由来。



ルイヨウボタン
(類葉牡丹)

葉のつき方がボタンに似るのが名の由来。葉や茎には毛はなく、花は10個程度が集散状につき、2～3cmと小さく黄緑色。

一面の類葉牡丹綺しく
花根の細道ベルの音止まる



アヤメ
(綾目)

山野の乾いた所に咲き、目もあやという程美しい綾目模様の名の由来。茎先に8cm程の青紫色の花を1～2個つける。花は、一日で萎む。



エゾノタチツボスミレ
(蝦夷の立坪葎)

名は、北海道に多いことが名の由来。伊吹山が南西限。花茎、葉茎、葉、萼片に長い毛があり、距は白く短い。花色は、淡紫紅色～白色。



イチリンソウ
(一輪草)

一本の茎に咲く花は一輪なのが名の由来。夏の前に枯れるため一夏草とも。花片状の萼が白色で5～6枚。葉は3枚が輪生。

春光に一輪草と周
は此のとき白さ
際立つ旬



ムラサキゲマン
(紫華蔓)

花の形が仏教の華蔓に似ているゲマンソウに近縁で紫色が名の由来。花は多数付き、筒状の花の先は濃い紅色。



イブキシモツケ
(伊吹下野)

伊吹山で最初に発見されたのが名の由来。石灰岩地の落葉低木。葉は互生で鋸歯があり、花には芳香があり、茎先から白い散房花序に花をつける。



ギンラン
(銀蘭)

黄色の花を咲かせるキンランに対して、白色でランを思わせるのが名の由来。茎は直立して細く、先に数個の白色の花をつけ、全体にキンランより小さい。

キンラン
(金蘭)



ヤマールISONO
(山瑠璃草)

放射状に出る地際の葉がへら状で大きく、茎の葉は小さい。花色からルリで、ルリソウと区別するため、ヤマがつくのが名の由来。



オカタツナミソウ
(丘立浪草)

葛飾北斎の富岳の立浪を連想させるのが名の由来。下唇は白色で紫の斑点はなく、下向きの毛が密に生える。下から開花。



ホウチャクソウ
(宝鐸草)

寺院や仏塔の軒に吊ってある宝鐸に花の形が似るのが名の由来。花弁が内側と外側に各々3枚ずつで、枝先に3～5個垂れ下がり咲く。



キキザサ
(雪笹)

花は円錐花序で、小さい両性花を多数つける。花弁も雄しべも純白で形もよく、雪の結晶のように見え、葉が笹に似るのが名の由来。

伊吹山三合目でニホンジカの食害等から植生を守る取組スタート！

2022年4月9日（土）ユウスゲをはじめ様々な草花が楽しめる三合目で、冬の間に下ろしていた獣害防止ネットを引き上げるとともに、傾いた支柱や損傷したネットの修復、観察路ゲートの設置を行いました。ネット内にはこのゲートから自由に入って頂けますが、**出入り後は必ずゲートをロックしてください。**万が一、鹿が侵入すると一夜で深刻な植生被害を引き起こします。



安全に登山を楽しんで頂くために～登山道整備事業も開始しました。

この冬は大雪となりましたが3月からは一気に気温も高くなり、登山者の皆さんが増えてきました。このため、4月17日（日）に登山道整備事業をスタートし積雪等で傷んだ誘導ロープや鉄杭を補修しました。今後定期的に登山道整備を実施します。なお、作業当日も登山道から落石がありました。**特に7合目から上部はニホンジカの獣害や大雨の影響で落石のリスクが高くなっていますので、「落石をさせない」「落石にあわない」よう十分に注意してください。**



コロナ禍で中止した植物観察会も再開。エイザンスミレにイブキスミレetc.

昨年度、コロナ禍で中止していた三合目植物観察会を再開しました。4月24日（日）小雨模様でしたが、エイザンスミレ、イブキスミレ、ニリンソウ、ササバエンゴサク、ヤマエンゴサク、カタクリ、スハマソウ、ウスバサイシン、ヒトリシズカ、イカリソウ、エンレイソウ、ツボスミレ、タチツボスミレ、クサボケ、アマナ、若葉のヤブレガサ、ウラシマソウ、マムシグサなどが見られました。5月は22日です。



連載 牧野富太郎博士と伊吹山 その2

8代将軍徳川吉宗は薬草の栽培や採集を奨励しました。伊吹山にも幕府の役人植村左平次が薬草検分に登っている様子が、松井徹夫さん所蔵文書からわかります。日本近代植物学の基礎となった『大和本草(やまとほんぞう)』や『草木図説(そうほんずせつ)』などには伊吹山産の植物がたくさん紹介されています。高知県の山間部佐川村の造り酒屋の一人息子牧野富太郎も、これらの書物で独学しました。そして、富太郎が伊吹山に初めて足跡をのこしたのは、明治14年(1881)19歳のときなのです。東京での博覧会見物と顕微鏡や書籍を購入した帰路、「私は関ヶ原あたりで従者と別れ単身伊吹山に登ることにして、(中略)伊吹山の麓では薬業を営む人の家に泊り、山を案内して貰った。頂上までは登らなかつたが色々な植物を採集した」。そして、東京で学んだ本格的な方法で、「ふもとの宿にもどると、夜おそくまで標本づくりに熱中しました」と自叙伝で述べています。



伊吹山の歴史 その1 関西最古のスキー場

伊吹山は1914年に越前高田でオーストリアのレルヒ少佐から指導を受けた中山再次郎氏により生徒のスキー指導に利用されたことからスキー場の歴史が始まる。1920年第1回伊吹山雪艇大会開催、1922年朝香宮殿下がスキーを楽しまれるなど昭和初期には国鉄も臨時電車を運行し、当時スキー場への乗客数は妙高スキー場を上回る1万5千人余と日本一であった。

昭和31年にリフト設置など本格的に開発され、地元では民宿や山小屋の営業など地域活性化に大きく貢献したが、雪不足やスキー人口の減少などで平成19年で営業が終わり96年間の歴史を閉じた。「写真で振り返る伊吹山物語」「伊吹山風土記」（サンライズ出版）参考

